

チャリティーライブによる、小児・AYA がん及び臨床試験の啓発活動の有用性

～ Remember Girl's Power 参加前後の行動変容～

可知 健太^{1) 2)}、濱崎 晋輔^{1) 2)}、柳澤 昭浩^{1) 3)}、鳥井 大吾^{1) 2)}、
夢みるアドレセンス⁴⁾、JILLE⁴⁾、分島 花音⁴⁾、丸山 純奈⁴⁾、Mary's Blood⁴⁾、PILE⁴⁾、山口 拓洋⁵⁾
1)がん情報サイト「オンコロ」、2)株式会社クロエ、3)メディカル・モバイル・コミュニケーションズ合同会社、
4)Remember Girl's Power出演アーティスト、5) 東北大学大学院 医学系研究科・医学部 医学統計学分野

背景・目的

2018年に閣議決定された第3期がん対策推進基本計画にて「小児・AYA世代がんの一般啓発」は分野別施策の1つとなる。一方、2012年に作成された臨床研究・治験活性化5カ年計画にて「国民・患者への普及啓発」が組み込まれた。しかしながら、我が国におけるこれらの啓発は欧米と比し、発展途上といえる。

欧米では、多くのミュージシャン・アーティストが立ち上がり、多くの団体・組織・企業の協賛のもと、ファンドレイジングによる課題解決を目的としたチャリティーライブが行われている。中でも、2008年に設立されたStand Up to Cancer (SU2C) では、CBS、ABC、NBC、FOXをはじめとする北米50以上の放送局やケーブルネットワークがコマーシャル無しで2年毎に放映する「資金調達でがん研究を支援するチャリティーライブ」であり、今までに6億300万ドルを集め、180以上の臨床試験の支援を行い、5つの適応のFDA承認取得に関与している。(参照：<https://standuptocancer.org/>)

一方、日本では、「がん検診啓発」等へのチャリティー活動はあるものの、臨床試験自体への取り組みは少なく、研究者の資金調達面は企業献金や公的資金へ頼らざるを得ない状況がある。

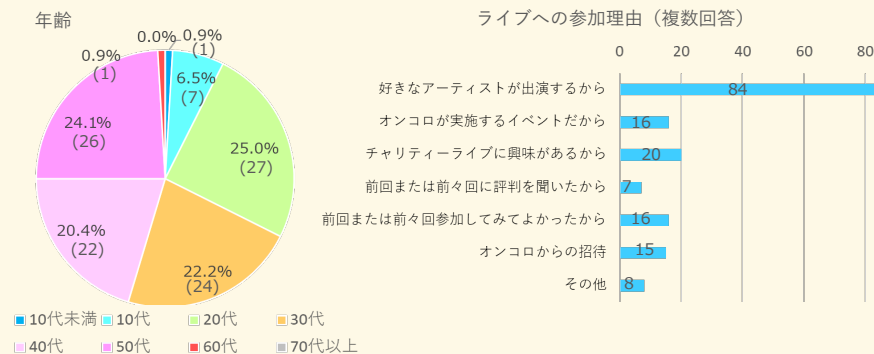
我々は2016年よりチャリティーライブ「Remember Girl's Power」を毎年開催し、啓発/寄付活動に努めてきたが、その有用性を検討していなかった。そこで、2018年9月1日に開催された「Remember Girl's Power VOL.3」にて、ライブ参加者に対して参加前後のアンケートを実施し、行動変容を検討することとした。



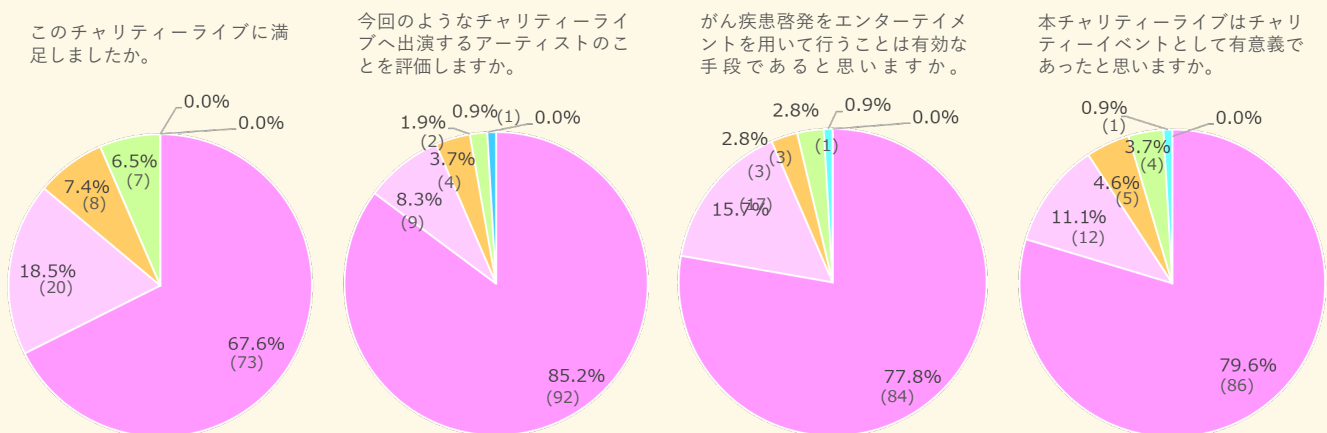
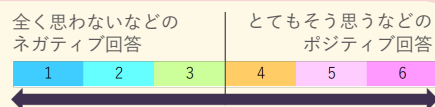
結果

ライブには約400名の来場があり、開催前アンケート回答者は187名、開催後回答者は129名、両回答者は108名であった。

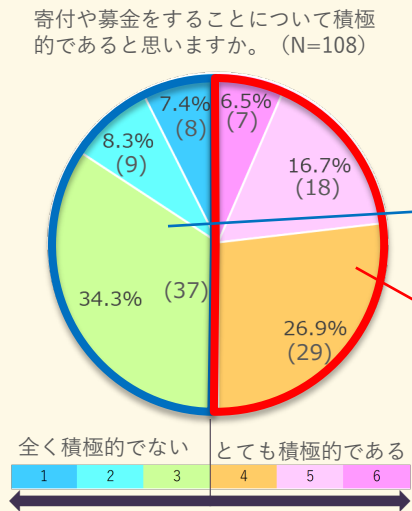
両回答者の性別は男性70.3% 女性29.6%、立場は社会人(製薬企業外)70.3%と学生13.9%が多くを占める一方、医療者や製薬企業等も4.6%みられた。がん患者以外は93.5%、チャリティーライブ初参加者が41.7%であった。年齢とライブへの参加理由の分布を以下に示す。(N=108)



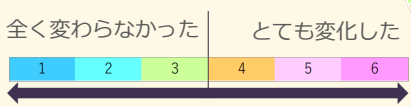
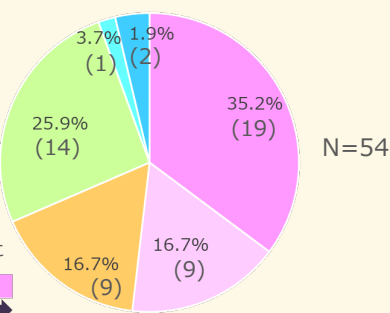
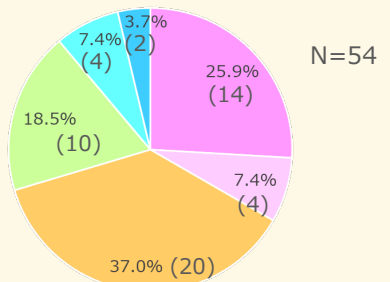
ライブ後のアンケート結果にて、満足度や活動への理解等を6段階評価(1～3はマイナス方向、4～6はプラス方向)にわけて集計した結果は以下に示す。(N=108)



ライブ参加前に寄付や募金に積極的な方とそうでない方に対するライブ後の気持ちの変化を6段階評価（1～3は非積極的、4～6は積極的）にわけて検討した結果を以下に示す。積極的、非積極的問わず、全体としてプラス方向へ有意に改善した（対称性の検定、 $p<0.001$ ）。

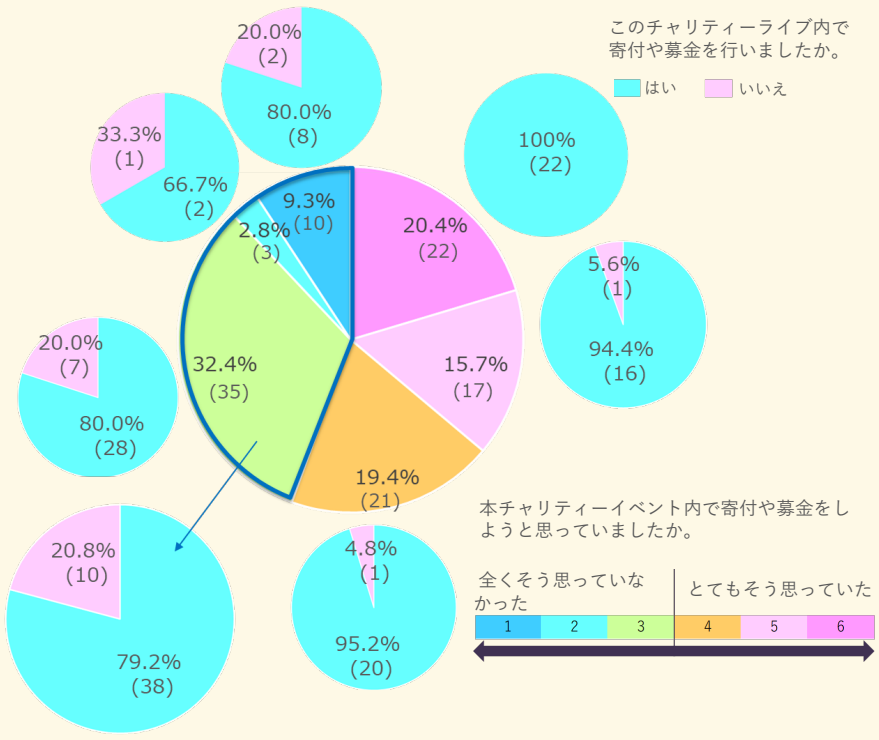
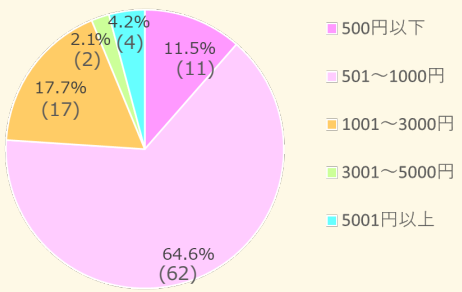


チャリティーライブに参加してみて寄付や募金をするについて気持ちの変化はありましたか。



ライブ参加前に調査した「本チャリティーライブ内で寄付や募金をしようと思っていたか」の6段階評価別に、ライブ参加後に「実際に寄付をしたか」を集計した結果を以下に示す。参加前に寄付や募金をしようと思っていたいなかった（1～3）が実際に寄付した参加者は79.2%であり、全体として有意な行動変容が認められた（McNemar検定、 $p<0.001$ ）。

寄付したと回答した96名（88.9%）の寄付金額は以下に示す。なお、ライブでの寄付総額は205,382円であり、全額国立がん研究センターに寄付した。



考察・結語

チャリティーライブ参加者の寄付割合は90%程度と高く、さらに、もともと寄付の予定がなかった参加者も80%程度寄付した結果となった。男女別にみると、寄付を行わなかった割合は女性28%（9/32名）に対して男性は3.9%（73/76名）となり、女性アーティスト限定というバイアスも想定されるが、男女間で差が認められた（ $P<0.001$ ）。テストステロン値が高いと社会活動に積極的になるという先行研究（C. Eisenegger et al. *Nature* 463, 356–359 (2010)）もあり、今後はアンケート調査だけでなく臨床パラメータなどの測定も検討したい。

以上のように、チャリティーライブ活動は臨床試験の啓発/寄付活動に有効であることが示唆された。今後も活動を継続し調査を行っていくことが重要と考えられた。

